
TSUWAMONO ~第一部~ 友との絆・互いの思い 外伝編

武竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TSUWAMONO～第一部～友との絆・互いの思い 外伝編

【Zコード】

Z6517A

【作者名】

武竜

【あらすじ】

この物語は「TSUWAMONO～第一部～友との絆・互いの思い」の本編で語られることのなかつた物語を記した作品です。よつて本編を読まれた後にお読みになられるのをおすすめします。

開戦

ルフィス歴1299年、ディーベルク王国はアルフォード王国に對し突如、宣戦布告をする。後にこの戦争は統一戦争と呼ばれ、後世に残る大きな戦争となる。この物語はこの戦争のきつかけとなつた宣戦布告と開戦前の兵士達の心情を書いた物語である。

輸送ヘリWF - 44 内にて

いつたい、どれほどの時が流れたのだらつ…。
腕時計を見てみると出発してからまだ数分しか経っていない。しかし、自分の中では既に半刻が過ぎた感じだった。
機内には異様な雰囲気が漂つていた……。

「まあ、無理もないかあ。今から戦争をおひぱじめよつとこいつのだからなあ…」

そう、全ての発端はあの第一声からだつた…。

四日前、ディーベルク城にて

「まず、諸君らに一言述べたい。諸君らは眞の戦士だ！」

緊迫した会場内を包み込むかのよつてその声は強く、そして重くひびき渡つた。

ディーベルク国王の演説はその一言から始まつた。

「諸君らも知つてゐることだらうが近頃、隣国のアルフォードが不穏な動きを見せてゐる。その動きを諜報部に調べさせたところ、アルフォード王国が我が国に進攻しようとしていることが判明した。これは我が国的一大事である！我が国の理念は争いのない世界を作ることである。しかし、今その理念を貫こうとすればたちまちこの国は彼らに滅ぼされことだらう。我々に残された道は一つ、アルフォードの我が国への進攻の準備が整つ前に彼らに先制攻撃を掛け、アルフォードをこの世から葬りたることである！諸君らにとつてこの戦争は苦痛となることだらう。だが私は諸君らに約束しよう。この戦争が集結した後、真の平和な世界が訪れるることを！」

緊迫した会場内から一気に歓声が上がつた。この國に、この王に、そして民のために、命を捧げよ。誰しもが国王の言葉に心を打たれたのだった。

兵士達の心は一つになつていった・・・。

輸送ヘリWF - 44 内にて

「...やるしかないんだな……」

しかし、やうにいつてもほとんどの兵士はこの戦いが初陣となる

者ばかりである。

周りの兵士を見てみると、手足をがくがくと震えさせている兵士や、神に祈りを捧げている者もいる。誰しもが恐怖や不安でいっぱいのだろうと思っていた……つが、中には全くといって動じていな者もいる。

特に目に止まつたのがどう見ても十代と思われる青年だ。髪は蒼く、腰には変わった形をした剣を差しており、先ほどから表情をぴくりとも変えない。しかし、その眼からは内なる闘志を感じられる。

「あんなに若いやつまでもが戦場に駆り出されるのか……『全てはこの国のために』か…可哀想なものだ。しかし、変わったやつだ。あの歳で平然としているとは大したものだぜ」

男は青年兵士を眺めながら自分があの歳の頃、何をしていたかを思い出していた。当時の彼は家の近くの公園で友達数人とよくファームズ（サッカーのようなもの）をやって汗を流し、泥だらけになって家に帰り、母親に叱られる、そんな平和な生活を送る青年だった。

時代は変わった。今や、アルフォードとティーベルクは完全なる敵対関係が出来上がり、戦争を始めてしまった。老若男女問わず、戦争に駆り出せる者は駆り出され、町はどこにこつとも緊張と不安の渦が渦巻き、平穀さは失われている。

男は争いごとが嫌いだった。本当なら戦争など起らしてほしくなかつた。だが今、自分はその戦争の真っ只中にいて、敵といふ名の人を何人も殺そうとしている。

何故か？答えは簡単だ。家族を、その家族のいる町を護りたかったからだ。戦わなければやがてアルフォードの進行軍に町は焼かれ、妻も息子も殺されるだろつ。

家族は彼にとつてこの世に一つとない宝石であった。自分の命そ

のものといつてもいい。

ヤラナケレバヤラレルノダ

男はその言葉を内なる自分に言い聞かせ、必死に戦争を肯定せた。男にもはや迷いはなかつた。

「神よ、私はここに誓つ。我が身がどれほど紅き血によつて汚れようとも我、家族を護るために命を狩る罪を厭わない。ただ、我が最愛なる家族をえ護ることができるのであるのなら……。神よ、どうかこの罪深き愚者に」加護を……」

やつはこの内にやくせくつせ作戦。ポイントへ近づこうとした。

「降下用意！」

ヘリの最後尾にあるハッチがゆっくりと開いていく。隙間からは太陽の日差しが機内を侵食していき、蒼穹の世界が顔を出している。指揮官の指示のもと兵士たちはハッチへと足を進め、パラシュー
トなどの装置の再点検を行う。

カウントと並行して全兵士たちが見つめる中、降下ランプがゆつぐりと点灯し始めた。

一つ目が点灯し、一間置いて二つ目が点灯。そして…
一瞬、時が止まつた…、そして再び動き出すと運命のランプが点
灯した。

戦士達は大空へと飛び立つた……

決意

満月の夜、とある城内の廊下にて

蒼色の髪をした青年は廊下にたたずんでいた。

青年は窓から見える真夜中の城下町の景色をただ茫然と眺めていた。

その景色はいつもと変わらない美しい景色だつた。

そこに一人の軍人が不思議そうな目で声を掛けってきた。

「どうしたのですか？何か不審なものでも見えましたか？」

「君はこの景色を見てどう思つ？」

尋ねられた青年はその軍人の質問に答えず逆にその軍人に聞いかげた。

「は？　この景色ですか？……いや、別にいつもと変わらない景色ですが……」

突然の問いかけに若い軍人は訳も分からず、率直に感じたことを述べるので精一杯だつた。

「そう、いつもと変わらない平和な景色だ……」

そう言つと青年はまた窓から見える景色を眺め始めてしまつた。その軍人はどうすることも出来ず、ただその場を立ち去るばかりだつた。

「そう、私はこの窓から見える平和で美しい景色を守らなければならぬ。民も、そして国王も……」

景色を眺める男の髪は蒼く、その腰に差している剣は変わっていた。この世界で剣といえば両刃のものが一般的であるが青年が所持しているものは片刃であったのだ。

変わっているといえば彼の外見もかなり変わっている。彼が身上に付けていた軍服は黒く、闇夜に溶け込みそうな感じだ。また、彼は顔の上から半分を仮面で覆っていた。その仮面もこれまた黒く、その形状は虎をイメージさせる。

彼は頭の先から足のつま先まで全身黒ずくめなのだ。

仮面に隠れてその表情は読めなかつたが仮面を通して町の景色を見つめるその眼には、何処か強い決意を感じられた。

そう、彼は決意していた。自分自身に、国民に、そして…敬愛なる国王に…

王の間にて

翌朝、仮面の剣士は王の間を訪れ、国王の目の前で膝を地に付け頭を下げていた。男の他にも複数の臣下が国王の左右に立っていた。彼らはみな式典用の軍服や衣装を身にまとっていた。

しかし、仮面の騎士だけは例外だった。彼は漆黒の甲冑にも似たバトルスーツを装着し、これまた漆黒のマントを羽織っていた。さらに、マスクと企画が同じなのだろう、マスクとメットがきれいにフィットしている。これによって彼の頭は完全に虎の形となつた。

国王は青年に歩み寄るとその右手を軽く持ち上げ、彼の仮面を通

して見える田を見つめた。

「×××よ、御主はこれまで我が國のためによく戦い、数々の勝利をもたらしてくれた。これこそ正しく忠臣たる者の行いだと思つておる。そして御主がもたらせた勝利は民を喜ばせ、また戦場における兵士に勇氣を与えた。よつてこれまでの功績を称え御主に軍事面での特権と『黒騎士』の名を授ける」

「はっ、ありがたきしあわせ！ その名に恥じぬよつ更なる戦果をもたらすことをここに誓います」

仮面の剣士の仮面の下から数滴の涙がこぼれ落ちた。

青年はこの国王を尊敬し、心の底から感謝していた。

彼は捨て子だった。まだ物心がついていないときに城の前に捨てられた身寄りのない子だった。

そんな青年を救つてくれたのが今、彼の目の前にたたずむ国王だった。国王は城の外に散歩に出かけていたときに偶然、彼を見つけたのだった。

国王はこのままでは赤ん坊が死んでしまうと思い、そのまま城に連れて帰り、彼を保護したのだ。そして赤ん坊の体調が回復すると、自分のツテを頼り、その者に彼を養子に取らせたのだった。

その話を青年は言葉を大分覚えた頃に義父から聞かされた。そして彼は国王が命の恩人であることを知つた。それ以後、彼はその義父の下で剣の腕を磨き、いつしか国王に仕えるのを夢見ていた。

そして彼が十四のとき、その夢はついに叶い、青年は護衛兵として国王に仕えるようになった。（彼の仮面はその名残のよつなもので国王以外にその素顔を見せないという忠誠心の現われによるものである）

仮面の剣士は現在、十六歳となり、その忠誠心はよつ一層のものとなっていた。

(「Jの国王のためなら... 三分せざじとないとでもやつしゆゆつ...」)

青年は改めて田の前で自分の右手を取りJの男に、心中で誓つた……。

後に彼は『黒騎士』と號ひ被り敵国の兵士たちに恐れられるJとなる。

敬愛なる国王が如づか、Jの國の名稱から取つた堂々たる名……

『ディーベル・クリスト』と號ひ名を仮面の奥に秘めながら……

レギオス 【赤】

軍用輸送ヘリ

アルマンとの戦闘から半刻が過ぎようとしていた。機内の窓からは先ほどの豪雨が嘘のような澄んだ空が見える。太陽は地平線の近くまでやってきており、空の色は夕陽によって柔らかい赤色に染まっている。

赤鬼はそんな空を機内の窓から呆然と眺めている。赤鬼の向かい側には青鬼が寛いでおり、口をこれまでとばかりに広げて大きなあくびをして見せた。その顔には長い緊張を強いられていたための疲労が表れていたが彼は別に気が付いていないようだ。

赤鬼はふと昔のことを思い出していた。それは昨日のことのようであり、ずっと前のことでもあるように感じる記憶。あの時が己の人生を賭けた復讐を誓った時でもあり、戦士として目覚めた時でもある。

そう、確かあの時もこんな夕陽だったような気がする……。

アルフォード軍第四大隊基地・病院

その男は突然、病室のベッドで横たわる私の前に現れた。男は軍用のコートに身を包んでおり、襟元を見るところ階級は少佐のようだ。

彼は静かに私のところまで足を運ぶと変化に乏しい表情で私と目

を合わせた。

そして皆のよつと口元をゆつくりと開くとたつた一言、私にこう告げた。

「君の妹を殺したのはアルマン・ギルガネスだ」

その一言によつて私を中心とした空間は時を失い、色彩をも奪い取られた。

この男は何を言つているのだ？ アルマンと言わなかつたか？ アルマンが何だつて？ 妹を殺した？ 何かの聞き間違いでないか？ あいつが私の……まさか！？

私は目の前、以前表情を変えようとしない、職人軍人というよりむしろエリート軍人と言う言葉の似合つ。男から放たれた言葉を理解することができなかつた。それは突然の発言といふこともあるが、妹を殺したのが最愛の友であるといふ馬鹿げた内容によるものが大きい。

私が困惑しているのを手に取つたのか男は再度、今度はより具体的にことの詳細をこれまた丁寧に述べてくれた。

「君の妹、リース・ザルバンの遺体から摘出された銃弾を調べたところアルマン少尉の銃から発射されたものであることが判明した。つまりそこから導き出される答えは唯一つ、アルマン・ギルガネスが君の最愛の妹の命を奪つたということだ。

しかし、軍は彼を裁かずこともありますに英雄に仕立て上げた。理由は簡単だ。彼ほどの人材はこの世に一人といない。それなのにたかがフレンドリーファイア（誤つて味方を撃つこと）ごときで彼を裁くのは實に愚かなことだと判断したためだ。悔しくないかね、憎くないかね？ 君の最も愛する唯一の肉親は軍の姑息な隠ぺい工作のために眞実から抹消されたのだぞ！ 私はそれを許すことができない。だからこそ君にこの眞実を伝えにきたのだ。最も知るべき

彼女の兄である君にな

私の背筋がスースと凍りつく。そして沈黙。私はこの男が話した内容を整理しようと思いつつ心を落ち着かせた。長き間、私の心を無が覆つた。

そして全てが整理された時、私の心を覆つた無は吹き飛び中から煮えたぎる真っ赤な業火が現れた。それは正に復讐の炎、己の利益しか考えない軍と妹を殺した友への怒りが私に一つの決断を下した。

「どうやら一つの答えにたどり着いたとうだな。よからう、君の手助けをしよう。この地図には国境線を越えるための秘密のルートが記されている。この通りに進めば、誰からも気づかれずに国境を越えることができよう」

私は男から一枚の紙を受け取ると腕に刺された点滴針を勢いよく抜き取りベッドから這い上がるとすばやく抜け出す準備をした。男はそんな私の姿を見た後、私の準備が整う前に病室を後にして、一人になつた私は準備を終えると男からもらつた地図を開き、今一度ルートを確認した。そして深く深呼吸をすると覚悟を決め、二階の窓から飛び降りた。

バロウ森林地帯

アルフォード軍山岳基地の病棟から脱走したレギオスは、国境兵士に見つからないようにしてドライアス山岳を越え、その麓に存在するバロウ森林地帯までやってきていた。

彼の身体の傷はまだ完全には癒えておらず、その身体には至る所

に包帯が巻かれている。彼がここまで来れたのは不思議なくらいで、常人ならベッドから起き上がれることも不可能な状態であった。彼をここまで来させた動力源はたった一つ、軍への、アルマンへの復讐心であった。

森林地帯を歩くこと半刻、レギオスの体力は既に限界を超えていた。その足元はおぼつかず、視界はぼんやりとしている。木々を掴みながら何とか前進を試みるレギオスであつたが思うように足が進まず、等々その場に倒れこんでしまった。

彼の意識が薄れる中、前方より一つの人影がこちらへと向かってきていた。彼はその人影を確認するや、完全に意識を落としてしまつた…。

森小屋

レギオスが再び意識を取り戻したのはとある森小屋の中だった。

彼は悲鳴を上げる身体を何とか起こすと辺りを見回した。小屋の大きさは五平方メートルほどで、見るかぎり全て丸太によって組み上げられているようだ。中央には幅三十センチほどの火床があり、炭と化した薪がくべられてある。入り口は火床を中心に置くように反対方向にある。

彼が入り口へと目をやつた時、突如扉が開かれ、斧を肩に担ぎ、片手に息のない獣を持った大男が中へと入ってきた。男はレギオスを見るなり、入り口付近の壁に斧を置いて友好的な笑みを浮かべながら彼のほうへと歩んできた。

「おっ、田を覚ましたかい。どうだい気分のほうは？」

男は声を掛けると共に床に腰を下ろし、火床に新たな薪を加えて火を起こし始めた。火を起こすと水の入った鍋を賭け、何かを作り始めた。鍋の水が沸騰すると男は持つて帰った獸の肉と水洗いした山菜を中心に入れ、よく火を通すと最後に調味料を加えた。そして出来上がった料理を不恰好な器に注ぐとレギオスに差し出した。

「こいつを食いな。味はそこそこだが見る見るうちに力が湧いてくるはずだぜ！」

レギオスは差し出された器を受け取ると添えられたスプーンを使って、黄金色の液体を口へと持つていった。その味は非常に濃厚で、長時間歩き続けてすっかり空腹となつた彼の胃の中で染み渡つた。彼は一口目を口に入れてからしばらく液体が胃に染み渡る感覚に浸つていた。そして完全に染み渡るのを確認すると今度は黙々とスプーンを進めだした。小屋の主はそんなレギオスの姿を見て安心したようでその頬は先ほどに増して緩んでいる。彼らは何も語らず、黙々と容器内の液体を口へと運んだ。鍋のスープは十分も経たないうちに空になってしまった。

レギオスは胃が満たされると深く息を吐いた。そして大男に顔を向けると深々と頭を下げた。

「行き倒れているところを助けてもらい感謝する。おかげで一命を取り留めることができた。是非とも命の恩人であるあなたの名を聞かせていただきたい」

大柄の男は目の前の青年が自分に深々と頭を下げる所以照れる様子で頭を書きだした。そして右手で拳を作ると自分の胸に当てながら自己紹介をし始めた。

「まあ、そう気にしなさんなって。俺の名はザムス、ザムス・ロド

リゲスつて言う者だ。この森で細々と暮らしてこる。ところであんちゃんは何て言つんかい？ それにその格好はどうしたんだい？ 見たところアルフォードの軍人さんみたいだが…」

レギオスは一瞬、自分がアルフォードの軍人であることがばれたことで気を引き締めたが目の前の男はそのことを全く気にした様子ではなかつたのすぐに警戒を解いた。

「私はレギオス・ザルバン。訳あつてアルフォードの軍から逃げ出してきた。要は脱走兵だ。ところで聞きたいことがあるのだがこの国の首都に向かうにはどうすればよい？」

「首都に向かうつもりかい？ そいつは無茶な話だぜ！？ 首都アルベラはここから何千キロも離れたところにあるんだ。その足で向かうにはあまりに遠すぎらあ。それにその格好じゃあ、首都にたどり着く前に巡回中の兵士に発見されて即射殺されちまつよ」

ザムスはそう言い放つと何か思いついたように両手を叩いた。そしてタンスの引き出しを開けるとおもむろに何かを探し出した。あれやこれやと衣服を放り出していたザムスだったがようやくお目当てのものが見つかったようで、じ満悦な表情で中から取り出した。それは彼が着るにはあまりに小さい衣服だった。

「こいつを着な。昔、俺の兄貴が着ていたやつだ。そいつなら見つかってもよほどのことがないかぎりバレねえはずだぜ」

「兄殿がおられたか。で、今はどこにおられるのか？ 町にでも出かけておられるのか？」

レギオスは何気なくこの質問をしたことに心底後悔した。先ほど

まであつた大男の笑みが消えたからだ。ザムスはしばし間を置くとつぶやくようにその質問に答えた。

「…兄貴はつい一年前に死んじましたよ。軍に志願して一年も経たないうちに敵さんの銃弾にやられかけましたのを…」

レギオスはそうか、と一言だけ告げるとそれ以上は何も聞かず、ザムスから古ぼけた衣服を受け取りさつと軍服と取り替えた。服のサイズはちょうど良く、手足を動かしてみたかぎり動きの妨げにはならない。レギオスはザムスに一礼すると小屋を後にしようとした。だが、後方から巨大な手に襟をつかまれ、強制的に止められた。

「おいおい、わっしの話ちゃんと聞いていたか？ 歩きで首都を日指すなんて無茶な話だよ。まあ、落ち着きな。歩いて首都を日指すなんかよりすこぶる良い方法があるんだよ」

ザムスはレギオスの体を自分のほうへ向けさせるとその良い方法とやらを話し出した。彼が言うにはここから数十キロ離れたところに【ドムント基地】という基地があり、その司令官に事情を話せば首都までの足を出してくれるそうだ。レギオスはしばらくの間、沈黙を続けていたが他に良い案が浮かばなかつたのでその案を呑むことにした。

大男は大斧を持ち上げると勢いよく扉を開き、レギオスに出発を促した。どうやら彼は基地までの道案内をしてくれるらしい。レギオスは再びザムスに一礼すると基地へと向かつため足を進めだした。彼らのロードはまだ始まつたばかりである…。

レギオス 【試】

ベスラ洞窟

バロウ森林地帯を抜けるとそこには一面に緑が広がる大草原が現れた。その大草原はとてもなく広く辺りには建物一つも見当たらぬ。草原を進んでいると時折、野生の動物たちと出くわすことがあつた。耳の長い小動物や、巣つい角の生えた草食動物の群れなど、そのほかにも数々の動物たちと出会つた。その度にザムスの講義が始まつたのだが、それほど興味があるわけでもなかつたので適当に相槌を打つていた。アルフォードにも当然、野生動物は生息する。ただ、不思議なことにこのディーベルクの土地で出会つた動物は皆、今までレギオスが見たことのない生き物たちだつた。

途中で小休憩を何度か入れながらも確実に前へと進んでいた彼らだつたが突如彼らの進行を妨げるかのように巨大な岩壁が現れた。その壁は高く、そしてほぼ九十度の傾斜をしていた。レギオスはどうしようかと悩んだがその悩みもすぐに解決されることになる。

壁には高さ四メートルほどの大きな穴が空いており、奥へと続いている。ザムスの話ではこの洞窟はベスラ洞窟と呼ばれ、十キロ先まで穴が続いているらしい。そしてこの洞窟さへ抜けければ目的の基地はすぐそこにあるのだという。

ザムスが洞窟の中へと入つていくとレギオスも彼の後を付いていく形で中へと入つていく。

洞窟の中は暗く、すぐ先のほうも見えないほどだ。ザムスは小屋から持つてきた松明を取り出すと先端に油を染み込ませマッチで火を付けた。これによつて大分視界が拡がつた。

洞窟を進むこと数刻、辺りはすっかり暗黒が支配し光といえばザムスの持つ松明のみだ。洞窟の中は奥へ進めば進むほど異様な

雰囲気に覆われており、魔の気配が感じられる。

そんな中、彼らは目の先に一点の明かりがあることに気がつく。最初は出口の光だろうかと思ったが次第に近づいていくとそれは洞窟に掲げられたかがり火であることに気が付いた。

そこは今まで通ってきた道より広くなつており、広場のような感じだ。かがり火は六つほど四方に散らばつており、闇からの支配を拒絶するかのように明るい。

ふと見るとレギオスは一角に告でできた巨像があることに気が付いた。大きさは全長一メートルほどあり、人の形をしている。いや、これは人の像ではない。その像の頭からは一本のいかつい角が生えており、大きく開いた口からは鋭い歯が飛び出している。その者の眼は異形のものあり、レギオスは睨まれている錯覚に囚われたしまつた。

「これは…鬼だな」

「うへえ～、こいつはまたすごい顔をしているな。ん？ 何か持つているぞ」

田の前の巨像に圧巻した両者はその像の両手に握られたあるモノに注目した。

それは両刃の斧のようでもあったが先端からは槍の刃が飛び出している今まで見たことのない武器であった。その武器の棒状の部分に田をやってみると名前らしき文字が刻まれていた。

「何か書かれているな。バル…バルベ…バルベルトか」

どうやらこの武器はバルベルトといつらしい。しかし、何故このような武器がこんな暗い洞窟の一角に鬼の像とともににあるのか？ レギオスは目の前にそびえる鬼の表情を見れば見るほどその疑問は

濃いものとなつた。

すると今まで通つてきた方角とは別の方角からおどりおどりしくなる。

ゆつくりと獸の足が近づくにつれ彼らの警戒心は強くなる。ようやく声の正体を視界に捉えることができた時、彼らはすばやく鬼の像からバルベルトを引き抜いた。

魔獸だったのだ。狼のような形をした魔獸が七匹、彼らの気配を察知してやってきたのだ。魔獸は神獸と違つて話など通用しない相手だ。ただ、本能にしたがい殺戮を繰り返す、正に魔といふ言葉の似合う獸である。

魔獸たちはレギオスらを視界に捉えると一気に彼らに向かつて跳びかかってきた。レギオスはザムスと目を合わせるとお互いの意思を確認し軽くうなずくと目の前の魔獸に向かつて勢いよくバルベルトを振り下ろした。

ズバシャ　ンッ！

あと少し遅ければ確実にレギオスは目の前で真つ二つになり二つの肉片となつた魔獸に食われていただろう。彼は自分の手の内にある武器の威力に驚くとともに自信を覚えた。すぐさまバルベルトを構えると今度は横に振り払い、一匹まとめて斬り裂いた。ザムスも彼に負けじと豪快に振り回し、魔獸たちを一掃した。

一分も経たないうちにその場にはレギオスとザムスしか立つていなかつた。バルベルトの刃には彼らが斬り裂いた魔獸たちの黒い血が滴り落ちていた。

レギオスは一息つくとレギオスと軽く拳を合わせる。お互いの戦いを称えてのことだ。そして再び、像に目をやると足元の台座に何かが書かれていることに気づいた。

そこには次のように書かれていた。

『我は復讐鬼。この両の矛を持つて我は復讐を果たせり…』

レギオスは「」と運命と「」のものを感じた。「」の鬼は私と同じだ。復讐を糧に生きようとしている。

彼は手に持つバルベルトを強く握るとバルベルトを鬼の像に掲げ。者を奪いし者の命を絶つ力を！」

洞窟の中で響き渡るその声は彼の決意を表すように長きに渡つて辺りを震撼させた。

レギオスはザムスのほうを振り向くと先へと進むよう促した。再び、彼らを暗黒の世界が支配した。しかし、先ほど感じた異様な雰囲気はもはや感じず彼らはスムーズに足を運ぶことができた。そして数分後、彼らは緑広がる大地へと出た。

ドムント基地

洞窟から出たレギオスたちは草原を抜け目的の場所、ドムント基地へとやってきた。

ドムント基地の門へとやってくると門の見張り番の兵士がやってきて、彼らに銃口を向けた。しかし、ザムスの顔を見るとすぐに銃を下ろし気軽に話しかけてきた。

どうやら知り合いらしい。ザムスは門番の男に用件を伝えるとななく基地内へと入ることができた。

その足で基地建物内へと入るとザムスは迷うことなくとある部屋

の前までやつてきた。そして軽くノックするとドアノブに手をかけ、室内へと入っていく。

レギオスも彼に遅れず中へと足を運ぶと部屋には一人の年配の男がゆったりとした椅子に腰掛け、こちらを見つめていた。

「やあ久しぶりだな、ザムス。山暮らしのはづはづだい？」

「こちらはいつもと変わらず何とかやつてますよ。司令もお元気そうで何よりです」

ザムスと軽く挨拶を交わした司令こと、バルザック大佐はこのドムント基地を統治する司令官である。彼は非常に温厚な性格で部下に優しいため、またそのカリスマ的な司令としての技量から基地内の兵士から慕われている。彼とザムスはザムスの兄を通して知り合つた仲であり、彼の兄亡き今、一人身になつたザムスをかまつてよくしてくれている。

「ところでザムス。君のとなりにいる彼はどなたかな？」

「あ、彼は山で倒れているところを俺が保護したんです。今日、この基地に来たのは彼の件がからんでます」

ザムスの軽い紹介が終わると本題に入るべく、レギオスは口をゆっくりと口を開く。

「私の名はレギオス、レギオス・ザルバンと申します。早速ではあります、が司令の人格を信じお願いしたいことがあります。私はアルフォード軍の一兵士であつたのですが、とある事から軍に嫌気がさし基地を脱走してここへ来た次第であります。もはや私に帰るところはありません。また、その気もありません。お願いです、司令。

私を軍に入れさせてください！」

レギオスは深々と司令に頭を下げた。それは相手に敬意を表す意味もあつたが自分の決意を表す気持ちが強かった。

バルザック司令は目の前で頭を下げる男をその貴祿を感じる眼で見つめていた。しばらくの間、思考に耽ると司令はレギオスに頭を上げるように促し、次のように述べた。

「君は何か強い決意を胸に秘めているね。それが何なのか私には分からぬが我が軍の兵士として戦いたいという気持ちはよく分かつた。よからう、私が軍のほうにかけあってみよう」

数日後、レギオスは再びバルザック司令の元を訪れ彼から偽りの身分証明書と軍に入隊するために必要な書類らを手渡された。

同じく、ザムスも入隊のための書類を無事受け取り、彼らは目の前の恩人に一礼すると首都アルベラを目指して部屋を後にした。

三年後・開戦

青き空の下、地上では戦士達が様々な意思を抱きながら戦場を駆け巡っている。

この世の地獄、戦場とは正にその言葉に相応しい場である。あるところでは一人の兵士が勇敢に戦い、そのすぐ近くでは何も果たせず無残に散っていく者もいる。

そんな戦場に彼らもまた足を運んでいた。

「な、な、なんなんだあいつらは！？」

「嘘だろ……こちらは四十人もいるんだぞ……」

「人間じゃねえ……あれはまさに……」

アルフォードの兵士が立ち尽くす目の先には一人の戦士が独特な形の矛を取り、次々と彼らを屍へと変えていく。彼らの装備はもちろん突撃銃なのだが、目の前にやつてくるその一人に銃弾は一つも当たらない。決して彼らは避けてなどいない。全て矛で防いでいるのだ。

一分も掛からぬうちに一人の男はアルフォード兵士四十名を地上に返してしまった。そのような偉業を成し遂げたにも拘らず、彼らは全く息を上げていない。

彼らはこの戦場において最新鋭のバトルスーツを着用していたのだがその色は戦場に似つかわしく赤と青という派手な色合いだ。そしてその表情は角の生えたヘルメットによつて隠され捉えることができない。

その姿は正に鬼そのものだった。レギオスとザムスは今まさに復讐の鬼として戦場に君臨したのだ。

「はッ、俺たちの手にかかりゃあアルフォードの野郎なんざ朝飯前だな、レギオス」

「作戦行動中は『コード名』で呼び合つと決めたであらうが、青鬼。それに自信過剰は己を死へと導くぞ。ここは戦場だ、もっと氣を引き締めろ」

「まあ、そう固くなるなよ。俺だつて内心は緊張しまくつてるんだぜ。まあ、安心しな。俺はまだ死ぬ気はねえよ」

一仕事終え、気を緩める青鬼ことザムスに渴をいたレギオスの下に一本の通信が入ってきた。

『「ひづら十四区担当、第七小隊。至急応援を求む！　くつ、一人のアルフォード兵士に押されている。頼む、至急応援を求む。このままで全滅してしまう！』』

通信が切れるとレギオスの表情は険しいものになった。ザムスもヘルメットごしでその表情は捉えることができなかつたが彼の周りの空気が緊迫したものへと変わつたためただ事ではないと判断した。レギオスは一度深く息を吐くといつもの冷静さを取り戻し、ザムスに語りかけた。

「「」の区域は一通り一掃した。至急、応援に向かうとしよう！」

彼らはすばやく行動に移ると田的の地、十四区を田指して駆け出した。レギオスは向かう途中、心の内で感じたものが強くなるのを感じた。彼は先ほどの通信で一つの推測を立て今やその推測は確信へと変わろうとしていた。

応援要請から十分後、レギオスらは田的の場所へとたどり着いた。辺りを見回すといたるところに味方の息絶えた姿が広がつてている。よく見ると五十メートル先に兵士たちが集まつてゐる。どうやら田的の敵兵はそこにいるようだ。レギオスは心の内を必死に抑えながらその場所へと向かつた。

そして彼の推測は現実のものとなつた。

兵士たちが激しくぶつかりあつ中、一人の男が常人離れした動きで次々とディーベルクの兵士を倒していく。長くもなく短くもない黒髪に、強い信念を秘めた茶色の瞳。手にはアルフォード軍公式採用の突撃銃RN-14を自分用にカスタムしたもの構えている。

それは紛れもなく己がもつとも知る男であり、共に戦い、分かち

合い、かつて親友と呼べた男。そして今では自分がこの世でもっとも憎む男であり、最愛の妹を殺した張本人。

「アルマンツ・ギルガネス！！」

突然の叫び声にアルマンは攻撃の手を止めてしまった。いや、アルマンだけではない。その場にいたアルフォード、ディーベルクの双方の兵士たちもその煮えたぎるような怒りの声に本能的に動きを止めてしまった。

アルマンは声の主のほうへと向き、その異様な姿に一瞬恐怖を感じた。目の前に立ちはだかる男が鬼のように見えたからだ。彼はすぐさま目の前に立ちはだかる戦士が只者でないことを理解したがそれ以上にどこか懐かしさを感じた。そして彼は次の瞬間に記憶が巻き戻されるような錯覚に囚われ目の前の赤い鬼が何者なのかを理解した。

「……レギオス……なのか。あのレギオス・ザルバンか？」

「そうだ、アルマン。かつてお前の親友であり、今は最愛なる妹を殺した者への復讐に燃える赤き鬼、レギオスだ！」

この日を、この日をどんなに待ち望んだことか。最愛なる人を貴様に奪われ、いつか必ず復讐を果たすと誓い、地獄のような思いをしてまで力を身に付けたこの思い……貴様には分かるまい、アルマン！」

突然の親友の登場にアルマンは言葉を失った。謎の失踪を遂げ三年が経つた今、かつての親友は己の敵、ディーベルクの戦士として現れたのだ。しかしその理由も彼が復讐に燃えるのも 全てアルマンは理解していた。この口が来るのを彼は本能的に察していたのだ。

「レギオス…。そつか、いつかこの日が必ず訪れると何となく感じていたがまさか敵国の兵士になつてしているとは……。良いだろ、復讐を果たすがいい。お前には復讐を果たす権利がある。それはおれも十分理解している。だがおれもこの命をすんなり渡すつもりはない。何故ならおれの命はあの日を境におれ一人のものではなくなつてしまつたからだ。おれはこの罪を償つためにも、そして二度と同じ過ちを繰り返さないためにもここで易々と死ぬわけにはいかんだ。どうしてもこの命を奪りたいというのであれば己が力で奪つてみろ、レギオス！」

次の瞬間、双方は激しく激突した。レギオスのバルベルトがうなり、アルマンのジークが吼える。両者共々、互いの攻撃をギリギリのところで交わしては反撃を繰り返す。その戦いはまさに超人同士の戦いであり他の兵士たちが援護、ましてや割つて出ることなど不可能に等しかつた。双方の兵士たちはただただ目の前で繰り広げられる戦いを見守るしかなかつた。

そして刻は流れ五時間が経過した。あれほどまでに激戦を繰り広げた両者であつたが、戦いに決着は付かなかつた。

レギオスは駐屯地に戻るなり、心の底から真っ赤な夕陽に向かつて吼えた。その声は空を駆け抜け、亡き妹の墓前まで届くほど激しいものだつた。

「すまない、リース。私は復讐を果たすことができなかつた。奴に勝てるほどの力を私はまだ持つていない。しかし、安心してくれ。お前が安らかに眠るためにも必ず！ 必ずや奴への復讐を果たす！ 例えこの身が滅びようとも、私はアルマンを必ず討ち取ると誓おう…」

この戦いで両者の因縁に決着は付かなかつた。しかし、この戦いによつて二人は双方の軍にその名を馳せることになる。

アルマンは【アルフォードの戦神】として、レギオスは【ティーベルクの赤鬼】として。そして彼らはその功績からつなぎ登りに昇進を果たし、今では戦局を左右させる部隊を率いるリーダーと成り果てた。

いつか双方の戦いに決着が付く日が訪れるだろ？。それがいつになるかは分からぬが彼らはそれを心から望んでいることであろう。

それが互いに愛した者が望んでいないことなど知りもせず……。

若き日の思い出 【妻】

定かではない日、アルフォード王国軍総本部

どんなに争いが激化しようとも必ず安息の地は存在する。お天道様は空高く上り、暖かな風が心地よく木々を揺らしている。鳥たちは轉り、徹夜で働いている者は、ひとときの休息として夢の世界へと潜り込む。

ノリス・ヒッター中将もその一人であつた。彼はアルフォードが誇る特殊戦略部隊、通称“特戦”の司令官を務めている。その姿は常に威風堂々たるものであり、彼の一聲は多くの部下を励まし、また勇気を与えてきた。そんな彼の胸には数々の勲章が下げられており、彼が以下に名だたる武人かを示している。まさにノリス・ヒッターは“軍人”としても“人”としても偉大なる人物なのである。

しかし、やはり彼も人の子。最近疲れが溜まっているのだろう、自室の椅子に深く腰掛け、転寝しているではないか。その姿はとも【戦場の稻妻】と敵兵から恐れられた軍人とは思えないほどまたりとしたものであり、老後を高原で過ごす気の優しそうな老人のようである。

「失礼します〜！」

そんな時、一人のまだどけなさが抜け落ちていない軍服を着た少女がトレイにお茶を載せてヒッターのいる司令室へとやってきた。その少女は最近、ヒロインの座を某副隊長に取られがちだと嘆いているリリスであつた。

その声に驚いたのかヒッターはビクッと体を揺らしながら半ばまだ眠り足りない感じで目を覚ました。

「すみません、もしかして寝ていました？」一応頼まれたお茶を持ちました

「ん…、いや気になくていい。気持ちはまだ若いときのままなのだがどうにも体がついていけないようだ。ま、ワシも老いには勝てんといふことだらう」

リリスが持ってきた茶をすすりながらヒッターはいつもの風格ある声で己を笑つて見せた。

「そんなことないですよ。司令はまだまあ若いですよ。私の父なんて司令より若いのにもう退職しているんですよ～？」

「ふふ、ワシに世辞なんぞ言つても何も出んよ。とにかく先ほどの話からして君の父親は軍人だったのかい？」

苦笑しながら訊ねる司令にリリスはにっこりと笑いながら積極的に自分の父親の話を始めた。

「ええ、そうです。私の父は元軍人です。ただ私の前では絶対に仕事の話をしないのでどんな軍人だったのかは私も分からんんです。一応、訊ねたことはあるんですけどそのたびに引きつった笑みで『すまない、昔のことは思い出したくないんだ』といつて話してくれないんですね」

「おそらく先の大戦でつらい過去を背負う羽目になつたのだらう…。まあ、その大戦に参加しても尚、現役でい続けるワシのようなスキモノもいるがね」

「そういえば前の『ディーベルクとの戦いで司令は【戦場の稻妻】といつ一つ名をもらつたんですね？ その時の司令はいつたいどんな感じだったのですか？ やはり現在のような感じだったのですか？」

その何気ない彼女の問いに司令は突如大笑いをしてみせた。いきなりのことに対しリリスはポカンと目を点にしている。

「カツカツカ！ いやすまん。つい昔の自分を思い出しておかしくなってしまったわい。リリス君、午後からはとくに急の用はなかつたな。ちょうど良い機会だ、ワシの若かりし頃の思い出話を聞いていかんかね？」

司令の提案にリリスは一度返事をすると高まる気持ちを抑えながら彼の思い出話に耳を傾けた。

「では始めるとしよう。あれはワシがまだ少佐だった頃の話だ……」

30年前、名もなき荒野の前線

木々も、草もそこにはほとんど存在しなかつた。あるのは「コツコツ」とした岩と、大量の薬きょう、そして無残に転がる敗者の屍たち。時は1270年、アルフォード王国とディーベルク王国はこの当時もお互いの領土をめぐり戦っていた。この戦争は最終的に十年後の1280年に平和条約を結ぶことで終結するわけだがこの頃の彼らにはそのようなことは知るよしもないことである。

血に飢えた狼たちが支配するその荒野にその男は存在した。周囲

の岩より平らな岩に腰掛けるその男はつまそうに目前の葉巻を吸っている。

「」の時点で既にハードボイルドなわけであるが男の格好はさらにすこかつた。赤茶けた灰色の軍服の袖を肩からバツサリと切り落とし、見とれるような鋼の筋肉を覆つた腕をさらけ出している。その袖なし軍服を男は胸をさらけ出すように着用しているためこれまたたくましき筋肉がシャツの下から自慢げにアピールしている。髪は完璧なまでの角刈りでそのうえから使い古された軍帽を被つている。極めつけのサングラスは男を完璧なまでのハードボイルドに仕立て上げている。（ちなみにこの当時まだバトルスーツは開発されていない。）

これらから分かるように男は眞の漢であつた。だがよくよく考えると明らかにその格好は軍法会議ものである。だがこの男にそのような常識は通用しない。何故ならば男は“ハードボイルド道”を極めていたからである。まあ実際のところは彼の部隊には彼より上の階級の者がいないというのが大きいのだが……。

「少佐！ 大変です、少佐ーー！」

そんな時、一人の青年が慌てた様子で男の下へやつってきた。青年はこれまた極端に軍の制服を生真面目に着こなしており、その生真面目さはこれほど熱いにも拘らず襟元をしつかりと止めているほどなのだ。

全力で走つてきた青年は男の下にたどり着くと、息を整える暇を惜しんで必死に言葉を口に出そつとしている。その様子を見た男は依然と葉巻をくわえたまま青年の真面目つぶりに苦笑してみせた。

「ゼエ、ゼエ…、ちょっと何笑つてているのですかヒッター少佐！

司令部にいなから「」からは必死であなたを探していたのですよー。

？」

「はつ、あんなエアコンの効きすぎたといふにいられるか！　その上禁煙なんてオレ様に出て行けといつているものじゃあねえか！それにしてもアジア、よくそんなクソ熱い格好していられるな？　ある意味男じやあねえか！！」

ヒッター少佐と呼ばれた男は青年アジアの正論な不満の声を逆に幼稚な不満であしらつてしまう。そうこの奇抜な男こそ後に特戦の司令としてケンたちを引っ張つていくあの偉大な軍人なのである。

「そんなことはどうでもいいんです！　それより大変なんですよ少佐！！　前線部隊の兵士たちが敵に押されていてこのままじゃ我々も撤退せざる終えないんですよ～！！」

彼の言い分によると一刻前に出撃した部隊が当初は押していたものの、先ほど急に敵の勢いが増し、形勢逆転になってしまったらしい。その報告を聞いたヒッターはとすると先ほどと変わらず葉巻を吹かし、地平線を眺めながらそがれている。その様子を見てまたアジアが小言を言おうとしたとき、急にヒッターが口を開いた。

「アタフタとしてんじゃねえ！　男だつたらドンと構える！！　安心しろ、あいつらはそんなにヤワじやねえ。何せこのオレ様と杯を交わしてんだからな～！！」

「…もうこいつ問題じやあないと思つのですが……」

突然口を開いたかと思つと命令を出すわけでもなく、自分の中でしか通用しない根拠を自信満々に語る肌の合わない上司に真面目な部下は半ば強引に呑み込まれてしまつ。

「つとまあ安心しろアシア。別にやつらを見捨てようなんて考えちゃいねえよ。オレ様直々に援軍に出向いてやる！お前は動けるやつを十人ほど呼んで来い。すぐに出陣するぞー！」

「えええ～！？ ちょっと待つてください！ 大将が前線に出るなんてどういう頭しているんですか？ あなたがここにいなくなつたらいいつた誰が各部隊に指示を出すんですか！？」

「お前がやればいいだろ？！」

あまりにもあつたりと答えてしまつヒッターにアシアは返す言葉が出なかつた。一応喉のところまで出かけていた言葉はあつたもの、今の少佐に何も言つても無駄だと判断し、腹底に押し返した。

「全く……あなたという人は、分りました、『命令どおり指揮権はお預かりします』

「すまねえな、アシア。お前との付き合いもかれこれ三年になるか？」

「さあ～？ あなたとこむと忙しくてそんなこといちいち覚えていらっしゃませんよ」

言葉はきついものの、アシアはこの上司が心の底から嫌いにはなれなかつた。最初、ヒッターの下に配属された時、彼はまだ士官学校を卒業したばかりのひよっ子だつた。

真面目一筋。それが彼の今までの生き方であり、正義であつた。そんな彼にとつてこの上司は正に天敵のような存在であつた。軍規は平氣で破り、書類関係全て自分に押し付け、そのくせ無茶な命令を突き付ける。アシアはすぐにでもヒッターの下から離れたいと心底願つっていた。

彼の心に変化が起きたのは配属されてから一ヶ月のことであった。

ちょうどその頃はディーベルクとの戦争が勃発した当初のことである。彼らの部隊は前線に配属され、日夜続く激戦に疲弊しきっていた。気づけば彼と、数人の兵士はヒッターたちと離れ離れになってしまい、その上手持ちの物資も底を尽きそうになっていた。

彼らは自分たちは部隊から見捨てられたと思い、絶望した。じりじりとではあるがディーベルクの兵士に囲まれていくアジアたち。それでも彼らは何とか生き延びようと必死に抵抗した。しかしそれもしばらくしてついに心身共に擦り切れ、もはや戦う意志すらなくなってしまった。彼らの現状を察したのかディーベルクの部隊はその歩を早め、ついに彼らを囲んでしまう。アジアは自分たちに向かられる銃口を薄れる意識の中、茫然と見つめていた。そして心底、無能な上司のことを呪つた。

その時である。突如、敵の一人が断絶魔と共に宙へと吹き飛ばされた。異変に気づいた敵兵はすぐさま断絶魔の聞こえた方向へと振り向く。しかし、近場にいた者は振り向く前にとてつもない衝撃が体を襲つたかと思うと次の瞬間には最初の兵士と同様、宙を舞つていた。

敵兵の兵士、意識が消えかかっている仲間の兵士、そしてアジアは見た。先ほどまで複数の敵兵が立っていたところに、見覚えのある一人の男が立っているのを。

その男は紛れもなく、彼のストレスの原因であり、恨みの対象であり、忌むべき存在あり、絶対的な天敵であり、そして彼の直属の上司に当たる男であつた。

「お~い、生きてるか？ 死んでいるやつは手を挙げろ！」

「……死人にどうやって手を挙げるというんですか、あなたは…？」

ヒッターはその返答に対し、豪快に笑いながら「それだけ元気があれば大丈夫だな！」と述べると単身、彼らを囲む敵兵を次々と蹴散らしていった。

ああ～、私にまだ反論するほどの力が残っていたのか…。それがアシアがまず初めに感じたことであった。そして彼は気づいた、この力はつい先ほどまで存在しなかったものである。この力は今目の前で敵兵を殴り倒している上司によつてもたらされたものである。彼はその時、ようやく自分の気持ちに気づいた。つまり自分はノリス・ヒッターという男を心の底から嫌いになれないということに。どんなに憎くとも、不満を感じても、どこかで自分はこの男を尊敬している。軍人として、一人の“男”として…。

次に彼が目を覚ました時には、彼はキャンプのベッドの上にいた。少佐は彼に何も言わなかつたが、話によると少佐は自分たちを見捨てて後退するという指揮官に一人で異議を唱え、指揮官がその考えを変えないと分かると突然彼を思いつきりぶん殴ると一人で自分たちを救出しに飛び出して行つたらしい。

非常に後先を考えない無謀な行為ではあるが、現に自分たちの命がここにあるのはそのような後先を考えない行動に走つたヒッターのおかげである。アシアは半ば呆れながらも命の恩人に心から感謝した。

以後、アシアは何度もヒッターに不満をぶつけたり、意義を唱えたりするが、二人の間には見えない何かが存在した。

「よし、それじゃあオレ達は、前線で苦戦している野郎どもを加勢しに行つてくるから、後のことは頼むぞ！」

数分後、少佐は部下を十人引き連れて、前線へと向かつた。その表情はいつものように人をからかつたような笑みでとても今から戦場へと向かう人間には見えないものであった。だがその表情はどこか仲間を安心させるものが込められている。

アシアは少佐を見送った後、軽くため息を吐くとクルリと反転しやれやれといった様子で司令部へと歩を進める。しかし、その表情は少佐といふ時のような振り回される男の顔ではなく、誇り高き軍人の顔へと変貌していた。

叛乱の発生 【続】

香氣な少佐が到着する少し前の激戦区

ヒッターが軽装甲車に揺られている時、彼の到着を待つ兵士たちは必死で敵の流れを押し返そうとしていた。しかし、何故か敵の勢いは衰えることを知らず彼らは奮闘しつつも後退を余儀なくされた。

「へへへ、何であいつら急に勢いが増したんだー!?

「つか、援軍はまだなのかよ?」

「じつは今大将がひさしだしてきっこむよだせー。」

「おー! そいつは本当かよー? いやあー、それじゃあこの勝負俺らの勝ちだな!!」

「馬鹿っ! 何、のんきな」と言ひてやがるんだ!! 今の現状じや少佐が来る前にわれらが全滅しちまつよ!」

そんな絶体絶命の中、先ほどから愚痴やら私語をこぼしている場違いな部隊が存在する。そう、彼らこそヒッターが言つてゐる同じ杯を交わした者たちである。

彼らはどうみても堅気の人間には見えない風貌をしており、その見た目のインパクトだけ取るとすれば、隊長であるヒッターと良い勝負である。

「へへ、ひょっとまさくなつてきたな。これじゃあ本当に兄貴が来

る前にお陀仏しちまうづぜー。」

「何縁起でもねえこと抜かしてやがるー！　お陀仏するならてめえ一人でしろつてんだ！！　…くそ、それにしても勢いの止まりねえ野郎どもだぜ！…！」

そのような弱音を吐きながらも彼らは引き金を引くことをやめない。それどころかますます攻撃の勢いを強めている。中には、無謀ともいえる乱れ撃ちで何人もの敵兵を仕留めている兵士もいる。

一見彼らは自分たちの身の危険を十分に理解できていないようと思えるが、実際は大違いである。彼らはその見た目からは想像できないくらいノリス・ヒッターという男に忠誠を誓っている。彼らにとって少佐は尊敬できる唯一の上司であり、同志であり、盟友であり、真の“漢”であり、絶対的存在、つまり“神”なのである。

そのような神掛った存在である男が自分たちを助けにやってくるのである。ならば否応でも士気は上がるものであり、事実彼らのテンションは最高潮に達していた。だがどんなに彼らの士気があがろうとも敵兵の勢いを止められるわけでもなく、他の部隊同様、敵兵に押されていた。

その時である、突如として轟音と共に軽装甲車が彼らの後方から突っ込んできた。軽装甲車は限界ギリギリのスピードで走ってきており、しかも停まる様子は全く見られない。誰もが轢かれると覚悟した矢先、軽装甲車は急ブレーキをかけ、ドリフトしながらそれのところで停止した。その一連の出来事に敵味方関係なく、硬直してしまつ。

周囲が唖然としている中、軽装甲車の扉が強引に開けられる。皆が息を呑みながら中から現れる者をうががう。そしてその男は現れた。

「野郎ども！　元気にやつてたか！？　お前たちが待ち望んだオレ

様の登場だー！！！」

ビシッとポーズを決めるヒッターをよそに周囲の兵士たちは未だに硬直していた。この男はいったい何をやっているのか？頭がおかしいのだろうか？などと疑問や怒りを感じつつ、目の前の男をただまじまじと見つめている。その時、ようやく時が動き出したのか、一人の先ほど轡かれそうになつた兵士が文句を言おうと口を開き始めた。

だがその声がヒッターの耳元に届くことはなかつた。

「うおおおおお！ 少佐ー！！ 待つてましたぜー！！！」

「我らが大将！..」

「兄貴ー、かつこいいつす！！！」

「稻妻の旦那ー！ いつもながら決まってますぜえー！！！」

突如としてヒッターを神と慕つ“ヒッター信者”、もとい彼の部下たちの盛大なる黄色い（？）声によつて男の声はもみ消されてしまう。

その声援にノリスは応えるように両手を挙げて熱き声を受け止めている。

「少佐！ 少佐！ 少佐！ 少佐！」

「大将！ 大将！ 大将！ 大将！」

「兄貴！ 兄貴！ 兄貴！ 兄貴！」

「稻妻！ 稻妻！ 稻妻！ 稻妻！」

更に興奮した者たちから一斉に“ヒッターコール”が湧き上がる。それは波のように広がり、いつしか周りのアルフォード兵士全員が彼に声援を送っている。その異様な雰囲気に押されてか、敵兵は未だに動くことができない。

そしてヒッターコールが最高潮を迎えたとき、いつのまにか軽装甲車の上に登つっていた少佐はアクロバティックに地上へと降り立つた。

一斉に、湧き上がる熱き男たち。そんな彼らに囲まれながらヒッターは一步一歩、堂々たる姿勢で敵兵たちのほうへと歩を進める。その時ようやく金縛りにあつていた敵兵たちは我に返り、一斉に自分たちのほうへとやってくる奇妙な男に発砲した。次々とヒッターに突っ込んでくる無数の鉛玉たち。このままではハチの巣になってしまう。事情を知らないアルフォードの兵士たちはほぼ同時に声を漏らしてしまう。

だがヒッター信者たちだけはあわてる様子もなく、じっと自分たちの神を見つめていた。まるでこれから起ることをすでに知っているかのように。

ヒッターと弾丸の距離が1メートルといつところまで迫った時、突如としてヒッターは弾丸の軌道上から体を移動させる。そして次、次といった感じで易々と飛んでくる弾丸を避けていく。しかし彼はギルガネス一族のような超人的な身体能力を持つ血族の者ではない。それなのになぜ彼は弾丸をいともたやすく避けることができるのか？いや実際はそうではない。よく見ると彼は一度も進行方向を変えてはいない。そして周囲の者たちはようやく彼の身に起きている異変に気づく。本当は“彼が弾丸を避けている”のではなく、“弾丸が彼を避けている”ということに。

それは正に異様な光景であった。少佐めがけて飛んでくる弾丸があと少しというところで急に軌道を変えるのである。そしてどの弾

丸も少佐とは全く離れた方向へと飛び、最終的には後方1、2メートルのところで地面へと着弾している。

一瞬、ヒッターに銃口を向けた兵士たちは目の前で起きた出来事が理解できなかつた。いや、実際にはその何秒後にも理解できなかつたわけであるが。

「ば、バカな…、何で弾が当たらないんだよー…?」

敵兵はあまりの驚きに思つたことをそのまま放つしかできなかつた。その敵兵からの問い合わせに対し、ヒッターは待つてましたとばかりにニヤリと唇を緩めると疊り毛のない目で勢いよく返答を返した。

「弾なんものはなあ、気合いで何とかなるものなんだよー…。」

(そんなわけないでしちゃが！－)

一瞬、アジアの突つ込みが入つたような気がしたが氣のせいといふことにしておこう。

ヒッターが弾丸の軌道を曲げられるのは彼が言つようになき合いの問題……なわけがない。では彼は特別な能力でも備えているのか？いやそれも違う。彼は確かに常人としては非常に高い戦闘スキルを備えてはいたがそれでも常人の域でどぎまつている。

この摩訶不思議な現象を引き起こしている要因は彼が両の腕に装着している籠手にあつた。

籠手の名は『ガンボルト』。構造や素材に至るまでほとんど情報が不明なこの籠手はある日、超文明の遺跡から発見される。分かっていることといえば、これを装着することで超高圧の電流を籠手が触れたものに流すことができるということ、そして先ほどのヒッターのように装着者に向かつて飛んでくる物体の軌道を変更するところだけだ。

最も、当本人は本気で氣合いの問題だと思い込んでいるわけだが

。

だが使用者がその機能を理解していようがいまいが事実として彼に弾は当たらないのだ。敵兵は彼に銃が効かないことを判断すると半ば恐怖を感じつつも武器を軍用の短剣に持ち変え彼に白兵戦を挑み一斉に襲い掛かった。

しかし、その判断こそが彼の待ち望んだものであった。

ヒッターは自分にかかつてくる敵兵たちを見下ろしながら今からいたずらをする悪ガキのようにニヤリと笑うと、瞬時に重心を低く構えた。そして次の瞬間には最も彼に近づいていた敵兵が彼の左手に引き寄せられ、脇腹に強烈な一撃をくらい宙へと舞う。その衝撃は相当なものであり、激痛を軽く通り越してしまっている。強力な物理的衝撃を加えられ、そのうえ体には高圧電流が勢いよく流れる。宙を舞い、自然落下する敵兵は一つの意味合いでまさに“体に電気が走った”のであった。

田の前で起きた仲間の惨事に他の敵兵たちは完全に腰が引けてしまう。しかしそのようなことはヒッターには関係がない。彼はゆっくりと新たに標準を合わせた敵兵に近づくと相手が反撃する（まだこのとき、この者に闘争心が少しでも残っていたらの話だが）前に、もしくは反撃を考える前に強力な一撃を鳩尾に浴びせる。さらに間を空けずに今度はその隣の敵兵の側頭部に全身の円運動で集束したエネルギーをぶつける。すると運良くそのエネルギーはその隣の敵兵にまで伝達され、さらに最初にエネルギーを浴びせられた男が衝撃によつて真横に吹っ飛んだことで周辺の敵兵四人をきれいに巻き込んでしまう。

次にヒッターは一気に敵兵たちとの間合いを詰めると下に構える右腕を思いつきり振り上げ一人の兵士の顎にクリーンヒットさせる。空高く放たれる敵兵士。だがその彼を一つの影が覆う。彼と太陽との間に割つて入つたのは先ほど彼を頭上高くと飛ばしたはずの男であつた。ヒッターは敵兵に歯を見せると彼を今度は打ち上げた速度

以上の勢いで下へと撃ち落とした。その勢いに下にいた敵兵らは成すすべなく吹き飛ばされる。数秒遅れてノリス・ヒッターは地上へと戻ってくる。しかしそれを待つていたとばかりに全方位の敵兵が彼に襲いかかる。

少佐は一度ぐるりと自分に向かつてくる敵兵を見渡すとやれやれと言つた様子で軽くため息を吐く。そして一度全身の疲れを抜くと右腕を空高く掲げ、一気に自分の足元の地面へと降下させる。

次の瞬間、彼を中心円を描くように地面に亀裂が走る。ヒッターに襲いかかるとした敵兵は突如の衝撃に足元をすくわれる。そして亀裂から閃光が走ったかと思うとうまくバランスが取れないでいる兵士たちは一斉に痙攣し、バタバタと倒れてしまった。

これが彼の十八番、【地雷掌】である。地面に直接衝撃と電流を放出することで360度全ての敵兵にダメージを与えることができる。ちなみにどうしてそのようなことができるのか？ 何故ヒッターはダメージを喰らわないのか？ その他にも多くの疑問があげられるわけであるが彼曰く、「オレ様ができると思つたことはできるんだ！」とのことらしい。

数百の敵兵を前に物ともせず一人で挑むノリス。次々と敵兵を蹴散らしていくその姿はまるで恐怖などという感情は持ち合わせていないかのようであり、そして彼は乱闘の中、笑っていた。それは恐怖をあおる笑いではない。それはむしろ温かみのある笑みであった。まるで自分は殺し合いをやっているのではなく、仲間とバカ騒ぎしているのだと思つてゐるかのように。

だが彼の本心がどうであれやはりその戦いぶりは、敵の士気を失わせるのに十分なものであつた。それでも敵兵たちは果敢に彼を仕留めようと勇気を振り絞つて戦いに挑む。ヒッターはそんな彼らを正面から受け止めた。そして次々と全力で打ちのめすのであつた。

若き日の思い出【参】

數分後

「Jの時点ですでに敵兵たちは完全に闘志を失っていた。代わりに彼らが感じていたものは純粹なる恐怖。それは人の中にかすかに残る動物的本能が引き起こすもの。

誰しもかその場から逃げたそことした、いや逃げたかった、たか
体は硬直し、全く動こひとしない、まるで石になってしまったかの
ように。

その時であった。突如として戦場に重低音の鼓音が周囲に響き渡る。

アーノラ、アーノラ、アーノラ、アーノラ

音は敵部隊の後方からやつてくる。そしてその音はどんどん大きくなっている。音を聞いた敵兵たちはすでに正気を取り戻したようで、顔色は青から赤に変わり歓喜の雄たけびをあげる者までいる。

太鼓の音はもはやすぐそこまでやつてきており、敵兵たちはその音に合わせるかのように拳を頭上に掲げる。その様子に今度はアルフォードの兵士たちに緊張が走る。敵兵たちはちょうどビッターへとつながる道を開け、その音を彼の下へと導く。

そして太鼓の衝撃音が最高潮を迎えたとき、ついにその者はヒッターたちに姿を現した。

年季の入ったボロボロの軍帽を深くかぶり、灼熱の太陽が降り注ぐ真夏だというのになびく、綻びだらけの軍用コート。その下には何も着用しておらず、ほどよく焼けた胸には血管が浮き出ている。腹にはさらしを巻いており、下の腹筋の形がきれいに浮き出ている。軍用のブーツもいったいどう使用すればそのようになるのかと思うくらい汚れ傷ついていた。

男はヒッターの2メートル手前で立ち止まると「王立ちしてツバの影で隠れている視線を彼へとやる。

直後、男の側に控える大太鼓を抱えた兵士が勢いよく太鼓を叩き始める。最初はゆっくりと、そして徐々にペースを速めながら音を小さくしていき、聞こえなくなつたかと思うと今度はそこから再び今度は音を大きくしながらペースを遅め、最終的に最初に叩いたペースに戻して叩くのをやめる。

田の前のゴートの男は思いっきり息を吸うと一番後ろの兵士にも聞こえるように次のように叫んだ。

「俺の名は～、ダイン！ オーウェン・ダインだつ～！！ アルフ
オードの男～！ 先ほどはよくも俺のかわいい部下たちをいたぶつ
てくれたなつ！ この借り、高くつくと思え～～～！」

男が言い終わると同時に再び、太鼓の音が響きわたる。おまけに敵兵士の士気はかなり高くなつていて。ヒッターはこの男こそが彼らの大将であると確信した。それは男の独特な格好や口調からではなく、彼から発せられる並々ならぬ闘気であった。

だがヒッターは一つだけ気になことがあつた。それがどうしても腑に落ちなかつた。明らかに自分の常識では理解できなかつた。彼は等々衝動を抑えることができず、直球でオーウェンに質問をぶつける。

「おひつ、一つだけ教える！ その…お前は何故こんなくそ熱い中、これまたそ熱そうなコートを着ているんだ!? オレ様にはどうしてもそのセンスが理解できねえ～！！」

(あんたの服装のセンスも理解できねえ～よ～～)

またもやっこにいないはずのアジアの声が聞こえたような気がしたがそれは置いとくとして、その問いにオーウェンは豪快にかつ簡潔に述べた。

「俺の趣味だ～！」

(やっぱお前のセンスも理解できねえ～よ～～)

もはや空耳では説明できないアジアの突っ込みが虚空を切る。それにしてもアジア、君はある意味真のツッコミだよ～。

そんなアジアの心の叫びが届いているのかいないのか、二人の男はじつと相手の目を睨みつけると口をはさまなくなった。辺りに緊張が走る。先手を切ったのはヒッターであった。

「お前、熱い目をしてるじゃねえ～か。まあその服のセンスはどうかと思うが、気に入つたぜ！ お前、オレ様とサシで勝負しやがれつ～！」

「貴様も良い田つきをしてやがる！ 同じく貴様とは一生服のセンスが合つことはないだろうが、良いだろ～！ その話受けて立とう！」

一間を置いて二人の男はお互に拳を構える。誰かが指摘するわ

けでもなく、辺りは一瞬にして静かになり双方の兵士たちはこれから始まる決闘に息を呑む。

先手を打つたのはヒッターであった。彼は強烈な跳躍で一気に間合いを詰めると、オーウェンの顎を目がけて左拳を引き寄せる。この攻撃をオーウェンはすれすれのところで回避し、それと同時に左フックをヒッターの右脇腹へと打ち込む。彼の拳がヒッターの脇腹に触れると同時に彼の拳から火の手が上がった。炎はすぐさまヒッターの皮膚を焼き始めた。辺りには肉の焼ける嫌な臭いが漂う。そのあまりの痛みにヒッターは声を上げそうになるが何とか気合いで抑え込み、全神経を脚部へと集中させ、大きく後ろへ後退する。

一連の出来事に掛った時間、何と2秒。まさに一瞬一瞬で勝負が決まる世界である。ヒッターは相手の行動を警戒しつつ、先ほど拳をくらった脇腹に目をやる。すると幸いなことに火傷はそれほどひどいものではなく、水泡が所々にできているだけであった。

「ちいー、やるじやねえかてめえ！　まさか拳から炎が出るとはなあ！」

「雷撃を放つ奴に言われたくはねえな！。俺の籠手は全てを焼きつくす炎の籠手！^{ガソレイム} 先ほどは運が良かつたが次はそうはいかんぞ！…」

今度はdainが先手を切つた。火傷を手で押さえるヒッターへと一直線に突進し、迷いなく右拳を放つ。これをヒッターは左手の籠手でガードするが、すでに彼が防ぐことを予測していたかのように左のフックを放っていた。これにはヒッターも反応が遅れ、何とか直撃は免れたものの右ほほに痛みを伴う熱さを感じる。しかも無理に回避運動を行つたため、体の軸がかなり不安定になってしまつ。dainはそこを見逃さなかつた。すぐさま強力な右ストレートをヒッターの腹目がけて放つ。

だがここで食い下がるヒッターではなかつた。後ろに仰け反る姿

勢の状態から下半身に力を込め、地面を蹴るとそのまま弧を描くよう脚を放つ。

「この奇抜な行動に今度はダインが驚愕した。彼はすぐさま右腕を戻して防御の体制に入ろうとしたが、紙一重の差でヒッターの蹴りがダインの顎に直撃する。これにはさすがのダインも顔を苦痛に歪め、後ろへ数歩下がってしまう。

ここからヒッターの反撃が始まる。一周して再び地面へと戻ってきた脚で地面を蹴り、すぐさまダインとの間合いを詰めると今度は彼の鳩尾目がけて拳を打ち込む。さらに苦痛の色に染まるダインへ、ヒッターは容赦なく次々に彼の体へと拳を放つ。そのとてつもない衝撃と電撃によってダインは反撃することができない。ヒッターは最後に仕上げにと彼の顎田がけて下から思い切り拳を振り上げた。

しかし、拳はダインの顎には当たらず空を切ってしまった。彼はヒッターの拳が放たれるのを確認すると気力だけで後ろへ跳躍したのだ。そのあまりの気迫にヒッターは身震いを覚えた。ダインがこの世のものとは思えなく恐怖したからではない。むしろそれは喜びから来ていた。一人の戦士としてこのような強者と自分は戦っているのだと考えると震えが止まらないのだ。

「くくく、おい何だこりや、この胸の内から湧き出る感情はよおー！ 何でかわからねえが俺様は今超絶にサイコーな気分だぜ！－！」

「やうか、そいつはいい！ 実は俺も貴様と闘つてると胸の内がワクワクして納まらんのだ！－！」

「へつ、どうやら俺様とお前は同じ穴のムジナみてえだな…、戦つて、闘つて、仲間が倒れても戦つて！ 腕を失おうが脚を失おうが闘つて！ 立ち上がる事が出来なくても戦い！ 敗けると分かついても闘い続け！ てめえの魂尽きるその日まで戦い続けることを狂喜する変態野郎つてところがな！－！」

ヒッターは吐き捨てるように叫ぶとその表情を満面の笑みで染めた。それはあまりに異常な笑みであり、敵味方問わず悪寒を感じさせるものであった。

「はは、貴様は本当に狂っているな！ ますます氣に入つたぞ。貴様という強敵に巡り合わせてくれた神々に感謝しよう！」

「ははは、違ひねえ！ ジヤつ、続きをおっぱじめるとするか！ そろそろこの衝動を抑えるのも限界なんであー！！」

「それは俺も同じだー！！」

刹那、先ほどまで楽しそうに話していた二人が猛烈な速さで突進したかと思うと、間髪入れずに相手の体に拳を打ちつけ出した。それはもはや路地裏のケンカとさして変わらないような光景であった。戦術もへつたくれもなく、ただひたすら相手を打ちのめす。唯一違うところがあるとすれば、彼らの一撃一撃が普通の者なら即死ものであるということだけだ。

ヒッターの拳が命中するたびに閃光が走り、aignの拳が命中するたびに灼熱の炎が上がる。双方とも無数の火傷ができてあり、そのあまりの痛々しさは見ている者にも痛みが伝わってきそうなほどである。だが彼らはそれらの火傷に全く気にしていないかのように拳を放つ手を止めよとはしない。

さらに彼らが異常であることに周囲の兵士たちは気づく。これほど壮絶な闘いを行っているにも関わらず、彼らはその表情を一度足りとて苦痛で歪めていない。またあれほど殺傷能力の高い一撃を相手に打ちつけているにも関わらず彼らからは殺氣が微塵も感じられない。そして最も異常であったのが彼らが激闘の中、笑っていたことだった。

何故これほどまでの闘いを行つてゐる中、そんなに無邪氣に笑えるのか、ほとんどの兵士たちはヒッターたちの様子を見て不思議がり、困惑し、そして恐怖した…。

それからどれほどの時が経過したのであらうか。口は沈みかけ、ほとんどの区域で勝敗が決していった中、彼らはまだ闘い続けていた。その顔はもはや原形を留めておらず、上半身もはだけており、その肌は黒く焦げている。辺りには肉の焦げた嫌な臭いが漂い、周囲の者たちの気分を害している。

もはや開いているかどうかも分からぬ目を見開きながら彼らは拳を振り続ける。流石に最初の頃と比べて勢いは大分衰えているもの、四つの眼の炎は灯つたままであった。

だが等々気力も尽きかけており、彼らは立つてゐるだけでも奇跡と云ふ状態にまで達していた。

「はあはあはあ…、いい加減…くたばりやがれ…つてんだ…」

ヒッターのアッパーがaignの顎に命中する。

「はあはあ…貴様の…ほうじや…わつわと地面…に這いつぶばれ…」

…

aignの右ストレートがヒッターの顎面に命中する。

だがそれでも彼らは倒れない、いや倒れようとしない。ただ己の中の闘争本能を満たすため、純粹な欲望を満たすために彼らはひたすら拳を打ち続ける。

その時であつた。双方の拠点基地から撤退の信号弾が打ち上げられた。陽はすでに落ちており、暗黒の空に輝く双方の信号弾は戦いで疲れ切つた兵士たちの心を照らすようであった。

信号弾の光を見て、ヒッターたちもみづやく拳を下ろした。そし

てほぼ同時に勢いよくその場に倒れた。それを見た兵士たちが急いで彼らの下に駆け寄つてくる。そして彼らの手を借りることで何とか立ち上がった二人の戦士は以前の顔が全く分からなくなつたお互いの顔を見やると高らかと笑い始めた。笑い声は一番端にいた者たちの耳にまで入るほど大きく、そして透きとおつていた。ようやく笑うこと止めると

「ふ……どうやらこの勝負お預けのようだな。だが良い闘いであった、貴様と貴様と巡り合わせてくれた神々に感謝する……」

「けつ、本当にタフな野郎だなお前つていつもやつは……まあ、おかげで久々に本気で殺りあえたがな。その首、今日のところは預けておくぜ！ いつでも来な、また相手してやるよ……」

お互に言葉を言い終えると最後にもう一度笑みを浮かべ、双方の兵士たちに撤退命令を出した。先ほどまでお互い殺し合いを行つていたとは思えないほど、そそくさと撤退していく兵士たち。それは一見不思議な光景ではあつたが、あのような戦いを見た後であるならそれほどおかしくない光景である。

かくしてヒッターたちの死闘は終わつた。だが戦いはまだ終わらない、いつ終わるのか分からぬ。だが彼らは例え、明日終わろうが、一年後に終わろうが、はたまた十数年経つてもまだ終わらないであろうが、その誇り高き命をかけて戦うであろう。それが彼ら“戦士”の使命であり、生きがいであるのだから……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6517a/>

TSUWAMONO～第一部～友との絆・互いの思い 外伝編

2010年10月21日22時06分発行